

近畿中部防衛局主催 第37回防衛セミナー
「富山の防災拠点 ～富山駐屯地の役割～」

日 時：令和2年1月29日（水）

場 所：砺波市文化会館

講 演：

○講演1 富山で災害が起きたとき

陸上自衛隊第14普通科連隊長兼金沢駐屯地司令 梨木 信吾

○講演2 富山県の危機管理について

富山県総合政策局 防災・危機管理課 危機管理調整主幹 福山 達也

○パネルディスカッション 「日頃、不安に思っていること」

モデレーター：福山 達也

パネリスト：梨木 信吾

赤松 保（第382施設中隊長兼富山駐屯地司令）

高畑 元昭（砺波市企画総務部総務課 防災・危機管理班長）

長谷川 智章（砺波市防災士連絡協議会会長）

満保 幸美（砺波市防災士連絡協議会）

【主催者挨拶】

近畿中部防衛局長の栞賀でございます。

本日は、お寒い中、「第37回防衛セミナー」にご来場いただき、誠にありがとうございます。主催者として一言ご挨拶申し上げます。

私ども近畿中部防衛局は、防衛政策や防衛省・自衛隊の活動について広く国民の皆様にご理解いただくために防衛セミナーを定期的開催しているところでございます。

近年は、大規模な被害をもたらす台風などの災害が頻発しております。また、平成7年の阪神・淡路大震災から25年が経過しましたが、その後においては平成23年の東日本大震災が、近年においては熊本、大阪府北部、北海道胆振東部地震などが発生しており、災害は現実的な課題となっていることと思っております。

富山駐屯地においては、今年度から災害対処の拠点となるべく大型回転翼機の離着陸が可能なヘリパッドを整備する工事が始まっております。この機会をとらえて改めて災害時の富山駐屯地の役割等について広く知っていただく機会とするため、ここ砺波市で防衛セミナーを開催することとしました。

今回は、テーマを「富山の防災拠点」と題し、講演1として、災害が発生し自衛隊へ派遣要請があった場合に、最初に、派遣されることとなる陸上自衛隊第14普通科連隊の隊長兼金沢駐屯地司令である梨木信吾1等陸佐から「富山で災害が起きたとき」と題しまして講演していただきます。

続きまして、講演2として、災害時に市町村を包括する立場から、広域的な総合調整を行う富山県総合政策局防災・危機管理課の福山達也危機管理調整主幹から「富山県の危機管理について」と題しまして講演していただきます。

その後、福山主幹をモデレーターとして、梨木連隊長、陸上自衛隊第382施設中隊長兼富山駐屯地司令の赤松保2等陸佐、砺波市企画総務部総務課の高畑元昭防災・危機管理班長と砺波市防災士連絡協議会の長谷川智章会長、満保幸美防災士による、パネルディスカッションを行っていただきます。

当セミナーが防災意識を高め、皆様方の有意義な時間となりますことを願っております。

最後に、本日のセミナーを開催するに当たり、多くの関係者の皆様のご支援・ご協力いただきましたこと、ここに深く感謝申し上げます私の挨拶とさせていただきます。

【開催地代表挨拶】

皆さん、こんばんは。今日は第37回の防衛セミナーということで、砺波市では初めての開催ということになります。このセミナーを開催していただきましたことに対しまして、改めて地元として感謝申し上げたいと思います。また、本日お集まりの皆さん方には、前半は特に防災、災害につきまして、ご尽力いただいていることを感謝申し上げたいと思います。

先ほど、局長さんのお話にもありましたとおり、砺波市は富山県で唯一の陸上自衛隊の活動拠点があります。なかなか、普段そんなに付き合いのない方もいらっしゃるので、陸上自衛隊の富山駐屯地ってどんなことをやっているのかな、駐屯地があることによって、例えば地元にとどのような良いことがあるのかなと、そういった話も含めて、本日はお話をさせていただけるということで、大変ありがたいなと思っております。

最近とにか、防衛の話もちろんですけれども、本当にどこでどんな災害が起きるか分からない。それも、大きな規模を頻発するというようになってきますと、やはり迅速な、また、大量なロジスティックが必要になってくるわけです。残念ながら、現在の富山駐屯地では、それまでの機能がないということでありまして、県、いろいろな関係者とお話をしております、何とか富山駐屯地の機能を強化する必要があるのではないかということで、防衛省のご理解を得て、仕事を進めているということでございます。

既に、工事の関係も始まっておりますが、そういった中身についても、やはり地元の皆様のご理解とご協力がないと進まないわけでございまして、そういったことも含めて、この駐屯地の必要性などにつきましても、実際現場におられる方にいろいろなお話をさせていただけるということですので、本当に有益なことかなと思っております。

金沢と砺波は近いようですが、やはり現場に少しでも近いところに新たな拠点ができるということが、地域の防災力強化にもものすごく役立つことでありますし、またそれが砺波にあるということがどんな意味があるのかということについて、お話をさせていただけるということでございます。今日は、そういったお話も聞きながら、砺波の防災のあり方、地域の安心安全も含めて、お話をいただければ良いなと思いますので、皆様、最後まで聞かれて、また、必要なことがあれば、普段あまりお目にかかれない方もいらっしゃいますので、質疑応答の時間があれば、お聞きになればと思っております。

改めまして、本日のご来場に感謝申し上げますとともに、防衛省・自衛隊の益々のご発展をご祈念申し上げます、挨拶とさせていただきます。本日は皆様、どうぞよろしくお

願いたします。

講演1 富山で災害が起きたとき

陸上自衛隊第14普通科連隊長兼金沢駐屯地司令 梨木信吾

【司会】

それでは講演を始めさせていただきます。講演1は、陸上自衛隊 第14普通科連隊長兼金沢駐屯地司令の梨木信吾 1等陸佐の講演です。

まず、講師の紹介をいたします。梨木連隊長は、平成8年に防衛大学校を卒業ののち、陸上自衛隊に入隊。第1空挺団、中央情報隊、幹部学校、陸上幕僚監部などで勤務された後、平成30年3月から現職の連隊長を務めています。

本日は、「富山で災害が起きたとき」と題して、講演いたします。梨木連隊長よろしくお祈りいたします。

【梨木信吾氏】

皆さん、こんばんは。金沢からやってきました、梨木です。

表題は「富山で災害起きたとき」なのですが、メインは次の福山先輩に細部のところはお話して頂くとして、私はもう少し広い視野のところで、安全保障環境から災害の対応、私の経験談を含めてのお話させていただきます。後半の部分は、今年平成31年度、令和元年度、一年間の金沢駐屯地の取組みを、少しDVDに12～3分にまとめてみましたので、それをご覧頂きます。

まず、この表紙ですが、皆さんよくご承知の立山です。今年、かなりの隊員に登山させました、劔岳です。先日11月に富山横断100キロ行進というのを、駐屯地あげて実施しまして、こちらは富山駐屯地に入る手前の道路の写真でございます。

それでは、簡単な自己紹介でございますが、私、和歌山県の高野山の麓の九度山町の生まれでして、関西出身でございます。

大学時代は、山岳部に所属していました。毎年、上野駅から23:30発の、たしか「急行のと」という夜行列車に乗り、午前5時前後に富山駅に着いたと思います。そこから、立山の室堂を通過して、劔岳の劔沢キャンプ場から立山・劔岳に登っておいりました。4年間、毎年のように10日間の劔岳に定着合宿をしておりました、劔岳の岩場などを登っておいりました記憶がございます。このように若い頃から、富山の皆さんにはお世話になっているというご縁でございます。

最初の任地は北海道の遠軽、今ならマイナス20℃という、寒いところでございます。そこを皮切りにこれまで約10回、今回の異動で11回目の引越をしましたがけれども、子供たちは大きくなってからは東京に定着しておりますので、私は単身赴任で金沢におるといような状況でございます。

まず、陸上自衛隊の取組みということで、簡単に安全保障環境についての防衛講話をする際、いつも中国・北朝鮮・ロシアについてお話しします。

日本の地政学的位置というのは、東アジアにおいて蓋をしているような状態になっていて、我が国の戦略的価値は非常に高いです。この価値をしっかりと高めなければなりません。災害に対しても、この富山、石川、福井というのは、日本海ルートのみならず真ん中に位置しています。よって、首都直下型地震、そして皆様も私も生きている間に一度は起こると言われている南海トラフ地震に対して、自衛隊の戦力をぐっと南に押し出す拠点になっているんです。ですから、富山は、地政学的に非常に重要な拠点になっています。金沢もです。そして、北朝鮮から弾道ミサイルが東京に飛んできたとき真上を飛ぶ位置にあります。富山に落下する可能性もあります。これらの危険性に対し、しっかり対応をとらねばならないと思います。

国際社会の情勢から見ても、アメリカのトランプ政権とイランとの関係、中国、北朝鮮、ロシアのと、様々な不安定要因があります。グローバルな課題の中において、現在自然災害も大きな脅威になっております。トルコの地震、オーストラリアの山林火災、日本においては東日本大震災から続く自然災害の多様化・激甚化もあり、これらにしっかり対応をとらないといけないと思います。

そうした中で、金沢駐屯地がどのようなことをしているかについてお話したいと思います。我々の駐屯地には、約1000人隊員がおります。第14普通科連隊というのが、だいたい900人くらい、その他の諸隊で構成され、併せて約1000人です。我々金沢駐屯地は、北陸三県を担任しております。

陸上自衛隊駐屯地は、全国に160カ所くらいあります。北陸には、まず金沢駐屯地が1つ、それからこの富山駐屯地、それから鯖江駐屯地と3カ所が核となっておりますが、非常に数的には少ないです。一つ一つを大切にその価値を高めていかなければならないと思います。私が管轄しているのがこの三県になります。

東京を出てくる際、先輩に言われました。「おまえ、いいところに行くな。金沢の連隊長というのは、他にどこにもない日本唯一の駐屯地連隊長なんだ。3つの県知事に対応しなければならない連隊長だぞ。三権の長だぞ。」と。別な意味の三県の長なんですけれども。防衛警備上、陸地の部分を管轄しているのが私のところになります。海の管轄は舞鶴基地が、空の管轄は小松基地が、とこういう担任になっております。そして、災害に関しましては、三県の県知事から要請を受ける立場になります。要請を受けると、名古屋の師団長に出動伺い、ご承認を得てから、出動となります。

北陸三県について、私自身非常に心配している点があります。黄色の長大な海岸線をご覧ください。ここは防衛にも災害にも非常に備えなければならないところです。私の管轄は福井県の高浜・おおい町から富山県の入善・朝日町まで、この海岸線は1100キロあります。これは直線距離にすると、東京青森間に匹敵します。この海岸線をいかに防衛するか、そして災害の発生に対応するか。特にその中でも、水害、雪害、そして山林火災、また活断層のあるところの直下型地震、そして多くの原子力発電所を抱えている場所でもあります。各地の連隊長の中で、抱えている原子力発電所が一番多い管轄の連隊長は、私です。

最近、本当に心配しているのは活火山です。弥陀ヶ原、立山の地獄谷のところですか。立山の室堂を降りたら、みくりが池を通過して、志鷹のおじさんのところの山荘を越えたところですか。20数年前、私が防大の山岳部にいた時分は、火口の噴煙のすぐそばまで行きました。20数年振りに行きましたところ、活動が活発になっており、今は上から見るしかない状況です。ここのマグマ帯は、災害派遣に行きました長野県の御嶽山のマグマと同じです。草津白根山も冬、噴火しました。若い女性を助けようとした、うちの自衛官が、噴石にあたり亡くなりました。幸いに女性は助かりました。火山がいつ何時爆発するかわかりません。夏や、秋の観光シーズンに爆発したら、大規模な災害派遣になると予想されません。

これらの活断層地帯。そしてこれからは、大渇水の時代がくるかもしれませんし、そんな時に大規模山林火災が発生する可能性もあります。また、急流河川が多いところですから、大量の雨が降れば水害が多いため、水害が多発し、水害対策もしっかりしていかなければなりません。そういう意味で緊張感のある勤務地であると認識しております。

私自身が経験した災害派遣についてご説明したいと思います。2年前の福井県の豪雪、その年は富山も雪が多かったと思いますが、その豪雪についてです。2年前の2月6日昼過ぎ、前の福井県知事から派遣の要請があり、8号線の、福井県のあわらの牛ノ谷から、福井の市内にかけて、雪かきをしました。到着時真夜中でしたので、真っ暗な中を隊員たちはスコップやそりのようなもので雪かきをしながら、トラックの運転手さんに給食を届けたり、衣料品等を届けたりの活動をしました。これは、永平寺の所の鉄道のビフォー・アフターです。

そして少し落ち着いていましたら、夏に西日本豪雨がありました。金沢駐屯地から合計約500人弱が出ました。まず、総社に行き、そこから倉敷市真備町に行きました。この真備町では水の滴る中、活動しなければいけないということで、そのときこれからの陸上自衛隊は土の上を歩くだけじゃない、水の中もしっかり活動出来る、水に溺れそうな状況でも、必ず生き残れる訓練をしておかなければいけないと思いました。

倉敷の活動が終わったら、次に呉市の北側にある、坂町の小屋浦に行き、泥上げをしました。この家がここなんです、川の水がこのあたりまできましたので、用水路がどこにあるのか全くわからない状態です。元々、この男性の家がここにあったということですが、この曲がったところにあったなんて想像もつかない大雨、土砂が流れ込んでいました。

坂町の町長に「元のとおりにしてほしい」と言われましたが、元の用水路がどこにあるのかわからないので、「どこにあるんですか?」と聞きながら、作業していました。

このことから、元の姿、今の現状の姿をしっかりと知っておかなければいけないということで、歩け歩け作戦を始め、今、1000人の隊員たちを歩かせています。北陸三県の姿を、自分の目と体と右脳に感じてこいということ、この前、富山で100キロ行進を、朝日町のヒスイテラスから魚津、富山市を通過して、射水、そして砺波、富山駐屯地まで100キロを300人近くで歩かせました。そういう地道な活動が大切になります。

その後、豚コレラがきました。富山は落ち着いていると聞いていますが、アフリカ豚コレラがきたら大変です。ウィルスというのは全部、大陸から来るんですね。豚も人もすべて気をつけなければならない時代になってきた。豚さんを殺すのは獣医さんがやりますが、我々は獣医さんのところに豚さんを運んで行き、亡くなった豚さんを袋に詰めて土の中に埋め、消毒をするという仕事でした。

また、6月18日に山形県沖で震度6度強の地震がありました。日本海が揺れました。富山はそうでもなかったかもしれないですが、津波注意報が出て、新潟、山形に津波警報が出ました。この時、県知事から要請がありませんでしたけれども、情報収集に行きました。金沢駐屯地から、一方は西周りから、一方は東周りから、能登半島を一周してこいに行かせました。潮位がそんなに高くなくて、たいしたことはなく、よかったです。

災害派遣は、今はもう県知事の要請を待たずに我々自身による情報収集をしっかりやらねばならないという時代が来たと思います。災害時において、県も機能しなくなった時、我々は我々の情報網でやれることをやらねばならない、そういう時代になってきました。

これは先日の台風19号、災害派遣で行きました栃木県那須烏山です。ここでは、給食・入浴支援といった作業に従事してきましたが、今年も大変な年でした。

これはつい最近で記憶にも新しいですが、派遣に行けと言われた10月13日がちょうど金沢駐屯地創立記念行事の日で、全部のプログラムを中止してこれにあたりました。毎年そういった災害がある時代です。

このような活動状況をスライドにまとめてきました。それを結びにしたいと思います。続きはパネルディスカッションで、お話をさせて頂ければと思います。

【司会】

梨木司令、ありがとうございました。

講演 2 富山県の危機管理について

富山県総合政策局防災危機管理課 危機管理調整主幹 福山達也

【司 会】

続きまして、講演 2 は、富山県総合政策局防災・危機管理課の福山達也危機管理調整主幹から講演いただきます。

まず、講師のご紹介をいたします。福山主幹は、陸上自衛隊を 1 等陸佐で定年退官の後、平成 26 年 1 月に富山県庁総合政策局防災危機管理課へ危機管理調整主幹として入庁、危機管理及び国民保護業務の総括者として勤務する間、富山県職員の災害派遣隊の長として、一昨年 of 西日本豪雨災害では広島県海田町へ、昨年の台風 19 号災害では長野県庁へ派遣され活動されておられます。

本日は「富山県の危機管理」と題して、危機管理、国民保護、防災への取組や留意点また、西日本豪雨や台風 19 号における教訓などをお話しいたします。福山主幹よろしくお願ひします。

【福山達也氏】

令和という時代が輝かしい時代になるためには、危機管理が最も重要となってくると思っています。いかに国と地方自治体が厳しい安全保障環境あるいは想定を上回る災害の発生に備えて危機管理を達成できるかということが、新しい令和の時代が良くなるかならないかの境目じゃ無いかと思ひます。若干厳しいような話もしますがこれが現実だと受け止めていただいて、皆さんに持ち帰って参考にしていただければと思ひます。

この写真は去年の入善における総合防災訓練の写真です。知事に防災の、災害の訓練状況を説明している写真であります。本日の内容は配付した資料にあるとおひ 3 つであります。まず危機管理上、すべての日本人が認識してほしいことをここに書いてあります。

安全保障で不安に思っていることで、北朝鮮のことがかなりたくさん皆さんからご意見がありました。よくわからない状況の中で、依然として核・ミサイルを持ち続けているという状況です。

また、最近、日本人が犠牲になるようなテロが海外で発生しています。自然災害については想定を上回るようなもの、富山県内にもたくさんの断層帯がございます。首都直下、南海トラフは富山県にはあまり影響ないと思ひてみても、経済的影響はものすごいものがあります。ちなみに、阪神大震災は約 10 兆円の経済被害と言われていましたけれども、首都直下となるといろいろな経済的なもの、証券取引が東京に集中していることなどを踏まえる 100 兆円近くになるのではとの試算もあります

また、新型コロナウイルスが発生しているわけですが、いろんな予想外の病気が発生してくるという状況にあります。特に北陸地方は北陸新幹線ができてから人の往来が激しいということで、危機管理上注意すべき地域ではないでしょうか。

特に断層帯については、富山県にある断層帯よりも、砺波市内においては石川県にある邑知潟断層帯が、地震部会の想定では何もしないと100人以上の人が亡くなるような想定となっています。ここにあるのが滑ってくるのですが、高岡の南部が震源となるケース4の場合、砺波市が大きな被害を受ける邑知潟断層帯であります。発生確率は非常に低いのですが、熊本地震にしても大阪の北摂地震にしても6%以下のところばかりがふいています。従って、いつ起こるかもしれないと思って対応しているところがございます。

風水害についても無いようで結構あります。私が平成26年に入ってから魚津市の土砂災害、南砺市の地滑り、こういったものを目の前で見ましたけれど、ここにもし住宅街があれば本当に大災害だと思います。たまたまここに神社があって、神社が止めてくれました。あと2メートルか3メートルで民家があったのですけれども、神社はすごいなと思いました。地滑りも利賀村の元スキー場ですが、毎日毎日滑ってくる地滑りでしたが、仮設の道路をつくって孤立しないように実施したというようなものも実際に間近にありました。

先ほど連隊長の紹介にもありました安全保障関係、特に東アジア情勢は非常に厳しいものがあると思います。北朝鮮だけではなく韓国、それからロシアの領土問題、中国は領土問題ではなく海洋進出による尖閣諸島での事案が発生している。こういったものが富山県に影響するか、関係ないのではないかと思いますでしょうが、最悪、北朝鮮がミサイルを撃った場合は朝鮮半島東岸から富山県まで840キロメートルしかないので、ミサイルは5分から6分くらいで飛んでくるという、遠いようで近いという危険なものが近くにあるという認識を持っていただきたいと思います。

ここにもあるように、最近、日本人も海外でたくさん犠牲になっている。去年12月8日中村先生が犠牲になっているのが一番新しいのですが、本当にテロが間近に迫っているのではないかということで、東京オリンピックが今年ありますけれども県としてもいろいろな訓練をして備えたいと思っているところです。

北朝鮮の弾道ミサイルですけれども、29年に2回日本の上空を飛びこえました。9月15日の2回目は約3700キロメートル飛翔しました。発射して19分間ということは、単純に計算して1分間で200キロメートル近く飛ぶということですね。富山県までなら5～6分で来ると言うことです。しかもJアラートは12の道県で鳴ったのですが、ミサイルが発射されてから3分後にJアラートです。東京を基準にしたら結構余裕があるのですが、富山県の場合1～2分しかないということで、速やかに部屋から出ないようにするしかないのかなと私は思っています。もっと早く伝えられないのかなと思います。これについては、自衛隊の方にしっかり守ってもらうしかないのです、よろしくお願ひしたいと思います。我々は、本当に退避するしかないというところです。

何故弾道ミサイルが怖いかというと、途中で弾頭だけとなり、これが大気圏外から落ちてくるのでものすごいスピードになるということです。短距離の弾道ミサイルでも秒速2キロメートルから3キロメートル、マッハで言えば6ぐらいですが、ICBM級となると秒速6キロメートル、マッハ20ぐらいで落ちてきます。海上自衛隊のイージス艦に撃ち

落としてももらわないと、航空自衛隊のPAC3で下から撃っても厳しいのかなと素人的には思います。

また、鉄の塊500キログラムから1トンのものが大気圏外から落ちてくるという、鉄の塊だけでも相当な、隕石と同じですから相当な被害が出ると思われるので非常に怖い。しかもICBMというよりノドンミサイルは射程距離が1300キロメートル、実戦配備されているので非常に警戒する必要があるというところです。さて北朝鮮はどうなるのでしょうか。非核化交渉のまま経済発展して普通の国になるのか。瀬戸際外交で去年は13回ミサイルを発射しましたがこういったことを続けるのか。ICBMを発射するのに踏み切るのか。さらにプエブロ号事件とか延坪島砲撃というような軍事的挑発に出るのかということですが。

この？というのは何かということも自己崩壊する可能性もあるし、トランプさんの堪忍袋の緒が切れて米軍が攻撃するということもあるのかなと。このラインはトランプさんのデッドラインです。どこになるのかなというところで、もしそうなると大量難民が来るとか、武装工作員が来て沿岸部を荒らすのかというような事態も考えられます。金正恩さんは亡命できませんので、脱線しますが基本的に世界の独裁者は、ヒトラーは自爆ですし、朴正熙は側近に殺害されました。そのような末路が待っているということで、彼についてはこういうもの（核・ミサイル）はなかなか離さないのではないかという気がします。

このような情勢であっても、まさか自分の所には来ないという風にみんなが思います。それは正常性バイアスという人間が持っている心理、正常化の偏見とも言われます。人生には「登り坂、下り坂、もう一つまさか」があると言われてはいますが、「まさか」ではなく「もしかしたら」という風に考えていただいて対応するということが必要だということですが。皆さん全員というよりは、特に自治体の職員にそういった気持ちを持ってほしいと研修でも言わせてもらっています。「人生には上り坂、下り坂、もう一つまさかがあるんだよと。このまさかを切り抜けないと登り坂にはならないということで、常に「もしかしたら」という発想でいて下さい」と。

自助、公助と有りますが公助でまだまだできることがあるんじゃないかなという風に、私は自衛隊を退職して6年勤務しておりますがそのように感じる次第であります。職員にはこのことは口を酸っぱくして言っています。

自治体における危機の種類は5つ、自然災害、事故、事件、事態、有事があります。上の2つは意思がない、下は人間の意思というか悪意が重なったものです。上の2つは災害対策基本法で下は事件を除き（事件は県警等）国民保護法で対処しています。

災害も国民保護事態も住民に被害が出て応急対策や被災者支援をやらなければいけない、自治体にとっては、の2つ目の危機に備えなければならないということです。いわゆる災害が終わってからの対応も自治体は危機と捉えてきちっと準備する必要があるということです。

危機管理とはいったい何なんだということですがけれども、危機管理法という法律はありません。自然災害は自治体が責任を持ってやることになっています。国民保護法は国が主体となって知事、市町村は法定受託事務となっています。しかし危機管理はなんの法律もない。では誰が責任を持ってやるのか。それぞれの組織が責任を持ってやらなくてはなら

ない、このような体制になっている。内閣法第15条に危機管理はどのようにしなければいけないのかは書いてある。それは緊急事態の対処と当該事態の発生の防止のこの2つだけです。このクライシスマネジメントとリスクマネジメントの2つをやるのが危機管理だと言っています。大きな法律でしか示されているものだけなので皆さんが危機管理基本指針を作っている。したがって富山県も危機管理基本指針を持っています。目的については速やかに初動態勢を確立すると言うことが目的です。

レベル1、レベル2、レベル3は県の危機管理課が判断しつつ、対応を取っていく流れになっています。今のコロナウイルスは、レベル1として県の厚生部健康課が事務局として対応している。これが例えば隣の石川県で発生し、近くなってきたら富山県はレベルを少し上げて危機管理態勢を取ります。更に富山県で出たとなるとレベル3、対策本部を設置する。わかりやすく言うところのこのような形で危機管理を考えるとということです。初動対応のレベル1から2をどういうものかと具体的に書いております。こういったものは対策本部を設置せず連絡会議態勢でやるということです。具体的にどういうものかというところ29年度は4回開いておりますが、北朝鮮の核実験、弾道ミサイル、これがレベル2のもので、知事が出席する場合があります。30年度は台風21号で1回やりました。

令和元年度は4回豚コレラとか長野県の台風19号災害の応援のためにやりました。これを超えるレベル3のものは、次のような基準でやっております。複数の市町村で災害対策本部設置あるいは10人以上の死者や行方不明者が出た場合にはレベル3として対策本部を設置するようになります。過去どのようなもので災害対策本部を設置したかというところ5つですけれども、鳥インフルエンザを除けば昭和59年、昭和56年、昭和38年の豪雪だけです。富山県は災害が少ないと言っているんですが、レベル2のようなものはたくさんありますし、災害に結びつくような要素はたくさん県内にあります。先程、連隊長は立山のことをおっしゃいましたが、いつ噴火するかわからないというようなものも県内にあります。初動体制はこのような形で態勢を取って県の対策本部を設置していくところなんです。

次は、安全保障、国民保護についての取組です。要はしっかり訓練をして、日頃から意識を持つということ、そして関係機関と連絡を取る。それと情報伝達、Jアラート、エムネットこういったものを整備して住民に危険情報を届けるように取り組んでいます。消防庁の方から国民保護ポータルサイト、内閣府のお知らせが貼りつけてありまして、消防庁の国民保護法運用室、国民保護法のポータルサイトもありますので見ていただければと思います。

富山県では弾道ミサイルを想定した訓練も高岡で実施をしました。すごく関心も高く、マスコミ19社、海外からも来たということでびっくりしました。学校でも訓練をやったということです。備えてやるしかない。早く知らせた逃げてもらうしかないということでやっています。また武装工作員や大きなテロが発生した場合には自衛隊、警察の共同訓練もやっています。平成17年からやり続けています。これが訓練の様子です。自衛隊さんに警護していただいて保育園児を避難所まで運ぶとか、除染、こういった訓練を2年に1回実働でやっています。

最後にですね、私が派遣になった豪雨災害や長野県の台風の災害の教訓ということで、重要なところをポイントとして話したいと思います。

土砂災害はすごくて地震と一緒にです。基礎ごと家を持っていく凄い威力だなと思いました。大きな岩と一緒に家を破壊して、街の上の方にあった住宅の瓦礫と山から来た木が重なって道がなくなってしまう。西日本豪雨では、広島の実田町に派遣されたんですが。このとき、最初に何をしなければならないのか。2次災害防止ですね、次の雨までに何とかしなければいけないということで道（避難路）をつける。連隊長もおっしゃったとおり水路をつくる。この2つにつきます。自衛隊あるいは民間を調整して早く道を開ける。まだ発見されていない人のところがたくさんあるので、地道に歩いて危険箇所を確認して自衛隊さんを要請して（次の雨が来るまでに）やる。このようなことが大切なのではないかなと思いました。

あと災害救助法を適用してもらうために県知事、政府にしっかりアピールする。これはここに水路をつくらないとダメだということを私が広島県知事の方に報告した様子。また、災害が終わった後の住民生活の支援、このための罹災証明の受付も重要です。これが富山県においてはあまりできていない。市町村或いは職員が実際に住宅被害認定調査をやらなくてはならない。そういったことを第2の危機と捉えてやっていただきたいということです。具体的にどういうことを支援したということは、言ってみれば被災した市町村に足りなかったことなんです。こういったこと（罹災証明の受付、住宅被害認定調査）を富山県として支援させていただいたということです。

今年の長野の派遣については、中部9県で延べ406名、約1ヶ月間派遣しました。富山県としては110名を派遣したということです。これも地震と同じなんですけど、水だけの力で家を破壊し、私が撮った写真ですが新幹線も10両水に浸かりました。市内の状況、鉄道の状況、凄い破壊力だなと思いました。ごみがすごい。自衛隊さんに協力してもらって仕分けしてもらってこの状況です。本当に最初から仮置き場を指定すべきだと思いました。災害ごみを区分する訓練も普段から必要だなと思いました。仕分けするのは大変な作業です。

決壊した千曲川堤防も約1週間程で仮堤防を北陸地方整備局さんが作ったんです。なかなか早かったなと。12ヶ所やられたのですが、割と仮堤防を作るのは早いなと思いました。これで非常に安心をしたということです。

応援業務についてはいろいろなことがありますけれども、教訓として言いますと早く情報を住民に伝えないと逃げ遅れが出ます。逃げ遅れの人たちをどうやって助けるのか、救出救助が終わってからの生活再建支援、特に住宅の被害認定調査が大きな業務の焦点となりました。あとごみの処理ですね。現場の状況については私が長（指揮官）だったので、日々、知事の方にテレビ会議で伝えて、富山県災害対策本部でやることを決定、支援してもらい、約1ヶ月やりました。TV会議で総務省、企画官、長野県危機管理監から直接知事に応援について依頼をしていただきました。

この教訓なのですが、最初の救出救助で取り残された人が1500人以上、でそのうちの大半は自衛隊が救っているのですけれども、ヘリによる救出、ボートによる救出をするようになるまでに、レベル4までに何とか早く逃げてほしいと思いました。しかし防災行政無

線がやられているので聞こえない。従って、これを聞こえさせるためにラジオであるとか個別受信機の設置が、地道だけれどもやらなければいけないのではと思いました。

要支援者も必ずしも水害の場合は計画どおりには行きません。取り残された介護施設には上からヘリで職員を派遣して、とりあえず水が引くまで保たせることも必要ではないか。あと2次災害防止です。普段から川の道を深くする、河道掘削をするということです。ただ、行政は計画的にやって危険箇所を優先してやらないので、その辺はもっともっと言わなければならないと思います。砺波市の庄川、小矢部川を国から委託されている県がこの川の底を掘っています。しかし年計画通りやってきて、本当に危険なところを優先的にやっているのかなと疑問に思うところはあります。危険なところを調査して、早くやってほしいなと思います。

あと生活支援、そのための自治体の訓練、これは行政が主になるのですが、生活支援の住宅被害認定調査のやり方がわからない。これは自治体の日頃からの研修、或いは危機管理意識のないこと、従ってわからない。長野県も御嶽山とかそういう所には住民は住んでいません。救出、救助は得意だけど、住民支援は苦手だった。そういうことで平時からやらなければいけないなと思いました。すごい教訓だと思いました。

29年6月3日、立山にセスナ機が落ちたことがありました。このとき陸上自衛隊から80名、航空自衛隊からヘリ6機で救出救助、災害支援要請を国土交通省がやりましたが、落ちたときに乗っていた人が生きていたので110番電話をしたので、こちらとしては安心したというところでした。ところが一向に見つからなかった。一晩中やりましたが見つからないということで。それは携帯電話の位置情報だけで検索していた。そうではないだろうということで航空自衛隊からレーダー情報をもらい、機影が消えたという小山谷というところを翌朝4時半ごろにフライトをしてもらったら、2~30分で発見できました。これは本当に大教訓で、災害になった時は安易な情報に飛びつくのではなく、情報を一元化してやらなければいけなかったなど。本当に残念でした。全員亡くなっていました。今でも心の傷になっています。低体温で亡くなったと思います。その日の内に発見できていればどの悔しさがあって、総合的に情報を収集すべきだったという教訓です。2度とこういう失敗はしてはいけないということで、これは航空機事故調査とは全く関係なく、私の個人的な見解です。

最後に、いつも県の職員に言っているんですが、もっと意識を持って訓練をしてくれと。計画だけで満足している、誰もが計画を持っている。パンチを食らうまでの話だと。その間後、ネズミのように凍り付くんだと。これを言った人マイク・タイソンです。

マイク・タイソンは敵が倒れていても、必ず次のパンチを出す準備しているんです。だから計画を作って安心するのではなくて、日頃の意識をしっかりとって、訓練をしっかりとやっていこうということを職員に言っています。

公助は限界、自助、共助でという前に、もっと公助をやるべき自治体が努力しないといけないというのが、私が富山県に入って6年の思ったことです。

従って、危機管理は正常性バイアスとの戦いだと、疑わしいと思ったら行動する、最悪

の事態を想定して行動する、空振りには許されるが見逃しは許されないということをいつも言っております。何かの参考にしていただいて、今日のお話が役立つことを期待して話を終わらせていただきます。

【司会】

福山主幹、ありがとうございました。

パネルディスカッション 「日頃、不安に思っていること」

【司会】

お待たせいたしました。パネルディスカッションを始めさせていただきます。まず、パネリストの皆様を御紹介いたします。

ステージに向かって中央のテーブル左手から、本日モデレーターを務めていただきますのは、先程講演いただいた、富山県の福山主幹です。

その右手、先程講演いただいた梨木連隊長です。

続いて、右側のテーブル左手、第382施設中隊長兼富山駐屯地司令の 赤松 保2等陸佐。赤松中隊長は、昭和61年陸上自衛隊に入隊。施設学校や第4施設団で勤務された後、平成31年3月から現職の中隊長を務めています。

続いて、その右手、砺波市企画総務部総務課防災・危機管理班長の高畑元昭班長。高畑班長は、昭和63年に砺波市に入庁され、平成29年から現職に就かれ、平成30年北海道胆振東部地震の折には、砺波市の姉妹都市である「むかわ町」において支援活動及び派遣調整を行われました。

次に、ステージに向かって左側のテーブル右手は、砺波市防災士連絡協議会会長の長谷川智章様。続いて、その左手、同じく砺波市防災士連絡協議会の満保幸美様。砺波市防災士連絡協議会は、地域防災力の向上を目的として設立され、地域における防災リーダーとして活動されています。

それでは、ここからの進行は、福山主幹にお願いし、「日頃、不安に思っていること」をテーマに、事前に皆様方からお寄せ頂いた質問をもとに、パネルディスカッションを進めていただきます。それでは、福山主幹よろしくお願いたします。

福山主幹： はい。それでは皆さん、ここからは素晴らしいパネラーの方々に来ていただきましたので、滅多にない機会ということで、出来るだけ多くパネラーの方に、皆さんから事前にいただきました「今、不安に思っていること」についてディスカッションしていただきたいと思ひます。

まず、今日は防衛セミナーということもありまして、事前にご質問いただいた中で、富山県で唯一の自衛隊の基地、富山駐屯地がございませけれども、小さいじゃないか、本当にこれで大丈夫なのか、というご意見もありましたので、まず、最初に富山駐屯地の赤松司令、そして災害上、富山駐屯地をカバーする立場にあります梨木連隊長のご意見を聞きたいと思ひます。よろしくお願ひします。

赤松司令： 富山駐屯地は小さすぎるのではないかとことすけれども、実際に富山駐屯地における実働人員については、約80名程度の隊員かもしれません。しかしながら富山駐屯地につきましては、富山県唯一の自衛隊施設であり、富山県内において万が一、災害が発生した場合においては、金沢の第14普通科連隊が駆けつけるわけですけれども、富山駐屯地と金沢駐屯を約40分の離隔距離があります。14連隊、関係機関と連携して迅速な情報収集活動、これが大変重要な任務だと自覚しております。

また、北陸で起きる災害派遣活動の基盤となる駐屯地として、梨木連隊長からご講演がありましたとおり、まさにその土地柄であります。災害の度合いに応じた部隊が迅速に展開できるヘリパットについても工事中でありますので、十分対応できると考えております。

梨木司令： 私の方から、若干補足させていただきますと、金沢駐屯地も、大型ヘリコプターが既に降りられます。大きいので東京ドーム3つ分くらいの広さです。そう言われると、相当大きいような気がしますが、いろいろな建物がありますので、ヘリが離発着するグラウンドは1カ所しかないのですが、やっぱりヘリで運ぶものは、人も物も限られるわけですね。

特に人を運びたいという時に、砺波の駐屯地がなかったら、他の所に降りなければいけないわけですね。砺波の駐屯地にヘリが降りられなかったらですよ。そしたら、人だけ降りてもまたそこから歩かなければいけない、重い荷物をおいて持ってこなければいけないという二度手間になるわけです。その点、砺波の駐屯地にヘリパットが出来るということは、より自己完結したエリアに必要なものが降りて、そしてすぐ活動が出来るということの利点は大変大きいと思います。そういった意味で、砺波の駐屯地、富山駐屯地が機能強化をして拡張していくということは、まさに富山県、富山県東部、そして砺波市の宝だと思いますが、皆さんいかがでしょうか。そういった意味では、即応性は間違いなく上がります。金沢から当然駆けつけます。駆けつけますけれども、まず砺波の所で出来ることをやっていただくという意味では、富山県と石川県の境界で何か起こったらどうするんだと、行けないですから。我々、100km行軍やっていますから、「歩いて行け！」と私は1,000人の隊員に言うのですけれども、それまでの間、人名救助出来ること、情報収集出来ることをしっかりやっていただくためには、砺波に今少ないメンバーしかいませんけれども、そこに十分な戦力をすぐ投入してやる、これは富山県のために必ずなります。私は、そういうことで期待したいと思います。以上です。

赤松司令： それと含めまして、私たちが現場にすぐ駆けつけて、情報を14連隊に流すとともに、県及び市にも情報を提供することによって、その様相が明らかになると考えておりますので、ご理解いただければ、幸いです。

福山主幹： はい、ありがとうございます。本当に心強いですね。自衛隊の災害での役割を聞かせていただきました。有事の際は、富山県を、特に砺波市を優先して派遣していただきたいと思います。

それでは次の「不安に思っていること」についてですが、今日はせっかく、女性防災士の満保さんが来られていらっしゃるのですが、満保さん「日頃不安に思っていること」についてご意見はございませんか。どうでしょ

う。

満保防災士： はい、本日はこのような機会をいただきまして、ありがとうございます。本日のテーマであります「日頃不安に思っていること」につきまして、私自身の梅檀山地区の防災士として、日頃から防災士同士での話から不安に思っていることがありますので、少し時間を頂戴してお話させていただきます。

私の住んでいる梅檀山地区は、砺波市の市街地から約12km以上離れた中山間地に位置し、大小12の集落から梅檀山自治振興会を組織し、また自主防災組織も置かれています。皆さんもご存じのとおり、人口が約400名と市内で一番少なく、さらに65歳以上の高齢化率が市内で一番高い約51.3%になっており、実に2人に1人以上が高齢者の地区です。地区の災害想定としては、集中豪雨による土砂災害、地震による地滑りなど、いずれも家屋の倒壊、道路の決壊、寸断、ため池の決壊等が予測され、これらの被害にともない孤立集落になることが想定されます。まさに最近の全国的な災害においてヘリによる救助が報道されていますが、それと同様な状況が想定されます。そこで、今日はせつかくの機会ですので3点ほど、お伺いしたいと思います。

1点目に、私たちのような狭隘な中山間地域でも、同様にヘリによる救助をしてもらえるのでしょうか。ヘリの到着までに、どれくらいの時間や日数がかかるのでしょうか。

2点目に、そのために地区としてどのような備えや準備、また情報共有などが必要でしょうか。

3点目に、平成28年度に県と市の合同防災訓練において、一度当地区で自衛隊のヘリの救助訓練を見学させてもらったことがあります。実際に住民は体験できるのでしょうか。昨年の台風19号で東京消防庁のヘリによる救助作業中に70歳代の女性が落下して亡くなった事故がありました。このことから、住民側も日頃から訓練や救助用装備の確認等の体験をしておくことが大切だと思ったからです。

この3点について、私の地区の防災士は5名いますが、皆が日頃から不安に思っていることです。是非、このディスカッションで回答や参考となるお話を聞けたらと思いますので、よろしくお願ひします。そして、梅檀山地区が孤立集落になりましたら、是非、皆さん助けてください。よろしくお願ひします。以上です。

福山主幹： はい、どうもありがとうございます。質問が3つ程あったと思うのですが、私の方でお答えしたいと思います。それに付随して、付け加えることがあれば、梨木連隊長、赤松司令、高畑主幹、長谷川会長よろしくお願ひします。

まず1つ目のご質問、ヘリの到着についてということですが、富山

県自体にはヘリが3つあります。1つは消防防災ヘリ、それと県警のヘリ、それとドクターヘリ、この3機がございます。この3機は、いずれも富山空港或いはドクターヘリは中央病院の屋上等にいますので、実際に梅檀山地区まで何分で来るかと言うと、10分以内で来ます。それは、スタンバイ出来ている状態であれば10分で来るということです。ただ、10分で来ても2つ目の質問にもなるのですが、一体どこに行けばいいんだ、梅檀山地区のどこに行けば良いかということは、なかなか上空から見ても分かりません。したがって、皆さんには上空から見てヘリに発見されやすいような準備をしていただきたいと思います。つまり、上空から見ても分かるように白い文字、一文字が4m位の大きさに「SOS」とか、「ここにいるよ」、或いは「ここに物資が欲しい」というようなメッセージを書いていただきたいと思います。これは、当然電話とかが通じれば良いですけど、地震とかの場合ですと携帯電話のアンテナが倒壊しているというような場合もありますので、こういった訓練は是非やっていただきたいと思います。これは、平成28年の砺波市の総合防災訓練の中で、南砺市が1回、山間孤立ということで文字の訓練を行ったという記憶がございます。それと、ヘリというのはどうでしょうね、私の感覚的には離着陸にかなりの広さが必要だと思うのですが、この辺は自衛隊のヘリの感覚として梨木連隊長、どの位の平坦な所が必要でしょうか。

梨木司令： チヌークという大型ヘリコプターだと、100m四方くらいですかね。小型のヘリコプターであれば、もう少し狭くて大丈夫だと思うのですが、ともかく梅檀山地区に救助に行く時は、拠点がこれからは砺波の駐屯地になりますから、直接降りて何かをする必要があれば降りますし、降りる必要がなければ砺波の駐屯地に離発着をして、そこに行って空中からヘリがホバリングした状態で救助するということになりますので、あまり離発着するためにどのくらい広さが必要かということについては、この拡張工事が終われば、もう心配する必要はなくなると思います。非常にそういう意味では、ここの価値がまた高まってくるかなと思います。

また、陸上自衛隊のヘリが何処にあるのかということですが、富山県は富山県でお持ちなのですが、我々から一番近い陸上自衛隊のヘリは大阪の八尾という所にあります。もう少し離れると鳥取県の美保基地という所にあります。また、群馬県に行けば相馬ヶ原という所に大きな基地があります。航空自衛隊は小松基地がありますよね。小松から飛ぶ時は良いのですが、いずれも遠距離から飛んでくるので、まずは富山県のヘリで対応して、それでも対応できないといいますか、事後の後詰めが必要であれば、我々が出て行くというようなかたちになるのかなと思います。

福山主幹： 先ほどお話したセスナ機落下の時に、小松基地から救難機の支援をいただきました。大体、私の感覚では20分ちょっとで来たかなと思います。梨

木連隊長のお話にもありましたが大阪の八尾という所から、近いのは富山県のへり3機、小松基地、こういった所のものが大体30分くらいで現場に到着するのかなという感覚があります。しかし、高畑主幹に早く要請していただかなくてははいけませんね。

高畑班長： 自衛隊の派遣というのは、市から県へ要請をして、県が自衛隊に出動を命令するということです。我々も当然、砺波市として災害対策本部を立ち上げ、情報の収集に全力を努めますが、市民の皆さんからもそういった情報はいち早く届けていただいて、砺波の駐屯地が拡張されて整備されますので、そういった力を是非活用して、災害対策に全力を努めたいと思っております。梅檀山地区もそうですし、砺波には山間地域がまだ他の地域もありますし、せっかく砺波で自衛隊の用地の協力とか色々自衛隊に協力していますので、砺波ファーストで是非お願いしたいと思っています。

福山主幹： 長谷川さんにお聞きしたいのですが、実際孤立した場合には、孤立する可能性のある住民の方の日頃の準備が非常に大事と思うのですが、そういったこと、またそれに限らず、気づかれた点についてお話していただきたいです。

長谷川防災士： 高畑さんのお話の中で、「連絡がほしい」と言われました。福山さんは「電話が繋がらない可能性がある」と言われてまして、どのように連絡したらいいでしょうか。

高畑班長： 今はSNSとか、そういう伝達手段を使って配信して頂ければと思います。あと、砺波市は県内で唯一、全自治振興会にMCA行政無線を平成29年配備させて頂きました。地震などで携帯電話が使えない、伝送が出来ないという時には、各地区には必ず無線が配備されていますので、それを有効に使って頂ければと思いますし、その訓練も毎年させて頂いています。そういったところを活用していただきたいと思います。

長谷川防災士： 福山さんから聞かれた、「普段どのように蓄えとか備えをしておくべきか」ということですが、防災士の方たくさんおられますから、私が言わなくても分かると思いますが、まず飲み物、食べ物、携帯ラジオ、懐中電灯、ヘルメットなど最低限その辺り、あと毛布、歯ブラシ、ティッシュなどの日用品等を、家族1人に1袋ずつ、持ち出し用の立派なものではなくて良いので、濡れても大丈夫なリュックなどに入れて常に用意しておくと思います。という自分はまだ準備していません。家には最低3日分の食料・飲料水の備蓄はしておく。それを持って避難所とかへ行く、孤立した様なところにいる場合は自衛隊さんは素晴らしいので、その日のうちに来てくれますから大丈夫でしょう。ただ市役所の連絡が遅れると到着が遅く

なりますけど、3日分あれば、その間に必ず救出に来てくれると思います。あと、各家庭で1週間ほどの、月曜日から日曜日までの家族分の飲料水、レトルト食品など非常食をストックしておいて、そういった食品の賞味期限は1ヶ月以上あると思いますが、賞味期限が切れそうな頃に避難した気分になって食べるような習慣を付けておく。そういうことをしていると、段々と災害で避難する時にしないといけないこともわかってくるかと思います。食べ物など持ち出す物についても、家庭毎に違うと思われれます。病人がいれば薬も必要になりますので、各家庭で考えていただきたいと思います。市役所に何をもち出すかを書く紙があると思いますので、そのようなものを利用していただきたいと思います。砺波市の回し者みたいですが、各家庭に「防災となみ」というのが配られています。これに各地の避難所とか、どういう行動をとればいいのか、何を持って行けば良いかなど書いてありますので、今日戻られたらもう一度ご覧になっていただきたいと思います。

福山主幹： 3つ目の体験の搭乗とか見学ですけれど、富山県の消防防災ヘリについては、申込みいただければ見学は随時できます。富山空港に防災航空センターがありますが、直接電話で申込み頂ければ、日程調整して見学は可能です。しかし、体験搭乗は実施しておりません。自衛隊さんの方では体験搭乗はあるのでしょうか。富山駐屯地司令、どうでしょうかね。

赤松司令： 富山駐屯地につきましても、防災の体験搭乗を今年につきましては2回実施しております。来年度につきましては用地拡張の工事中であるため、金沢駐屯地にお願いしまして砺波市民方、防災関係に携わる方等が、ヘリの体験搭乗という枠がありますので、ご相談頂ければ指揮系統を通じて、体験できるように対応していきたいと考えております、

福山主幹： そういった申込みは、基地にしたらいということですか？

赤松司令： ご相談頂ければ、対応したいと思います。

福山主幹： 自衛隊ヘリの体験搭乗も可能性はあるということですので、是非。

満保防災士： 今日、振興自治会長も来ておられますので、振興自治会長から。

福山主幹： 梅檀山地区の住民全員が体験搭乗できるというわけにはいかないですが、いろんな質問をいただいています。その中で講演の時にもお話した水害についての質問が多かったので、水害について私の方から話したいと思いますので、パネラーの方々にもご協力頂きたいと思います。

国土交通省に浸水想定があり、庄川水系の浸水想定というのがあります。

これは何年に1回の被害を想定しているかということですが、100年或いはそれ以上、150年位だと言われています。概ね48時間で655mmが降ったという場合に可能性があるということで、それを基に浸水想定を出しています。庄川水系には小矢部川も入っています。両方の川の影響を砺波市は受けるということです。150年に1回の水害によれば、砺波市は残念ながら全域が50cmくらい浸水するような想定になっています。

これは国土交通省のホームページから庄川水系の想定というふうに見ていただければ、川の情報というところから入っていただいても良いし、そういったインターネットで確認ができますので、確認していただければと思います。150年に一度位の水害が来ると、残念ながら砺波市全域が浸水する可能性がある想定となっています。ただし、655mmという量がそんなに多いかと言えば、去年の台風19号をみればあり得るような降水量なのかなと思います。そういった場合に備えて、先程、教訓でお話しましたが、まずはレベル4までに全員避難、これを目標に情報伝達をして頂きたいと思います。その情報伝達という観点では、高畑さん、水害の情報伝達に関して砺波市はどのように準備されていますか。

高畑 班 長： はい、今、福山さんがおっしゃられた様に、砺波市では、昨年3月に、国のデータに基づき、砺波の庄川で、48時間588mm、概ね1000年に一度という想定で、洪水ハザードマップが作られました。砺波のほぼ全域が浸水するという事、浸水の高さは50cmから3メートルと範囲が広いですが、砺波市内の50パーセント以上ほぼ半分が浸水することになります。このハザードマップを全家庭にお配りして、早め早めの避難を心がけて頂きたいということと、情報に関しましては、皆様が各々自助の中で情報を取得するためには、携帯電話の登録をしておくとか、エリアメールを受信出来るようにしておくとか、自治会組織でそういう伝達網を作っておく。それと地震と違って、日頃使っている避難所が水没するという可能性もありますので、少し離れた所にある、2階建ての安全な場所に避難してみる、そういった訓練も各自治振興会の中で積極的に繰り返して頂くことが、非常に大切なことではないかなと思います。

福 山 主 幹： 万が一、砺波市が水没したときに、富山駐屯地は大丈夫なんですか。

赤 松 司 令： 富山駐屯地については、河川から近い所ということもあり、小さいながらも三階建ての体育館等保有しております。また施設機材等もあります。富山駐屯地は自活出来ますので「大丈夫だ」と、信じていただければと思います。

福 山 主 幹： 自活のみならず、救出の方はいかがでしょうか？

赤松司令： まずは富山駐屯地が生き残ることが大事です。そこを起点として、自衛隊が応援に来て災害に対処するというのが可能になると思っております。

福山主幹： 東北に多賀城駐屯地がありまして、東日本大震災の時に私の同期が副連隊長でいたんですけれども、「さあ行くぞお！」と思ったら津波が来て車が全部浸かってしまい、車での出動が出来なくなったため、駐屯地はさておいて、隊員たちだけが現場に行くことになったという記憶が残っています。赤松司令、ぜひ参考にして頂きたいと思います。

赤松司令： わかりました。

福山主幹： そういうことも過去ございました。水害の方は終わりました、次に地震についてでございます。

砺波市については、先程講演で言いましたとおり、邑知瀧地震というのが被害が一番大きいです。富山県防災会議の地震部会が出している被害想定で見ると、砺波市は邑知瀧断層帯、要するに高岡市南部が震源となった場合、今のままであれば、砺波市は124名が亡くなり、1147名が負傷し、全壊家屋5473棟というような想定で、多分、砺波市にも配られています。こういう大災害を引き起こす断層帯が、石川県内にあるということをご認識していただきたいと思っております。

こういった場合は速やかに災害派遣要請ということになりますが、この場合富山全体が揺れていますので、我々もなかなか参集出来ないのではと心配しています。そういった意味で、自衛隊さんの地震の派遣の基準を、例えば震度何度以上だったらどうするかなどの行動基準を連隊長さんに教えていただければと思います。

梨木司令： まず震度5弱以上の時に、情報収集部隊を出すようにしています。

福山主幹： これは県が要請しなくてもですか？

梨木司令： 要請しなくてもです。全国に陸上自衛隊の部隊がありますが、約4000名の部隊、ファーストフォースという部隊がありまして、その部隊は1時間以内にその駐屯地を出発して現地に到着する即応態勢を取っています。よって陸上自衛隊には管内には必ず一定数、駐屯地の中に寝泊まりをさせるという義務項目をもって仕事についてもらっていますので、初動体制は大丈夫です。

一方で、大量の部隊を出すことについては、県知事の要請があつてから部隊が大量に動いていくということになりますが、石川県でも災害が起これば、全国からかき集めてくることになります。今、陸上自衛隊で一番大きな組織が方面隊というのがありますが、その上に陸上総隊

という新たな組織が昨年出来ました。陸上自衛隊15万人を、1人の指揮官が1つの意思決定をもって動かすことができる組織ができました。それをもって「北海道から前へ、九州から前へ」と迅速に人を動かしていくという流れになると思うんですけども、なかなかヘリの数も少なく、時間も限られていますから、まずは我々金沢と砺波にいる人間でできる限りのことをまずやる。特に人命救助、これを第一にやっていきたいと思います。

福山主幹： ありがとうございます。県としましては、地震があった場合、職員の緊急参集をしまして、受援体制をどうするのか、自衛隊さんにどこにきてもらうのかというような調整が、まず最初のとっかかりになるかと思いません。そういった意味では、市町村さんは地震が発生したとき、広域部隊をどこに野営させるか、砺波市の場合は目安はついているのでしょうか。

高畑班長： 地震の場合ですね？

福山主幹： はい。応援部隊ですね。

高畑班長： 砺波市の場合は、業務継続計画というのを平成29年度に作っておりまして、災害時にまず職員が参集できる体勢、訓練もしています。どういった所でどういった援助、受援を必要とするか、まだ受援計画は作っているところですけど、関係機関との連携がとれるようにまとめております。実際、市の総合防災訓練では、本当に多くの関係機関の方々と連携を取りながら、当然自衛隊さん、警察さん、消防さん、ライフライン関係の皆さんと連携をとった訓練をここ近年、積極的に行うようにしております。そういった皆様の援助を受けながら、災害を乗り越えていきたいと考えています。

福山主幹： ありがとうございます。最後に個人の命を守る行動について、長谷川さんにお聞きしたいと思います。

長谷川防災士： まことに簡単なことです。逃げることです。家族とか人を助けようと思う前に、まず自分が逃げることです。それが一番です。自分が助からないと、他の人を助けることはできません。だから、毎日は無理かもしれませんが、各家庭で避難行動をどのようにするのかということをお話し合っほしいです。先程も言いましたが、これ（「防災となみ」）にもどのようにするかということを書いてある部分があります。富山県、ましてや砺波市なんて本当に災害がない平和な所ですから、危機意識がない。自分もありません。正直言うと、家具の転倒防止とかしてないです。もう少ししたら、家を建て替えようと思っておりますので、そのときしようかなと思っています。地震が起きたら自分が寝ている部屋のタンスが二棹ほど倒れ

て、ぺちゃんこになってしまうのではないかなと思っております。

そういうことから、家族で家のどこが危ないぞとか、普段から話し合っ
て改善していく。逃げる時はどこに逃げるか、水が出たらどこに行くとか、
地震が起きたらどうするのかということ話し合い、各家庭で命を守る行
動をとっていただきたいと思います。

福山主幹： ありがとうございます。まだまだ沢山のご質問をいただいています
が、時間の都合もございまして、これをもって第37回防衛セミナーの
パネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。パネラーの
皆さん、ありがとうございます。皆さん、ご静聴ありがとうございました。

【司会】

ありがとうございます。最後になりますが、大型ヘリが離着陸可能となり、富山の防
災拠点として役割を担うこととなります、富山駐屯地の赤松司令から一言よろしく願
いします。

赤松司令： 本日は「富山の防災拠点～富山駐屯地の役割～」として防災セミナーの
開催にあたり、地域住民の方々多数のご参加により、富山県における防災
に関する貴重なご意見を頂き、富山の唯一の実行部隊の長たる私、富山駐
屯地の重要性を再認識致しました。砺波市につきましては、日頃から自治
体及び行政が一体となって防災活動に積極的に取り組み、防災意識の高い
町であると着任以来認識しておるところでございます。本セミナーを通じ
て、関係機関とのさらなる連携の強化を実現できるよう努力していきたい
と考えています。

また富山駐屯地においては、来年3月までに、場外離発着場を完成させ
るため、現在駐屯地の拡張工事を実施中でありまして。工事が完成しまし
た後には、災害時に防災拠点となる駐屯地のみならず、砺波市において日頃
から関係機関、警察、消防等との連携を深めるとともに、訓練において自
衛隊内の施設を有効に活用出来るよう、努めていきたいと考えております。

また地域住民の皆さまに関しましても、駐屯地の見学・駐屯地創立記念
行事における駐屯地解放等により、地域住民の方々と交流を深めるととも
にさらなる自衛隊に対して理解を得られますよう、日々の訓練に頑張っ
ていきたいと考えております。

そのようなことで、今後も変わらぬご支援、ご協力をお願い致しまして、
最後のご挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

【司会】

ありがとうございます。

